

赤い姫と黒い皇子

小川未明

青空文庫

ある国くにに美しいお姫ひめさまがありました。いつも赤あかい着物きものをきて、黒くろい髪かみを長ながく垂たれていましたから、人々ひとびとは、「赤あかい姫君ひめぎみ」といつていました。

あるときのこと、隣となりの国くにから、お姫ひめさまをお嫁よめにほしいといつてきました。お姫ひめさまは、その皇子おうじをまだごらんにならなかつたばかりでなく、その国くにすら、どんな国くにであるか、お知しりにならなかつたのです。

「さあ、どうしたものでしょうか。」と、お姫ひめさまは、たいそうお考えかんがになりました。それには、だれか人ひとをやつて、よくその皇子おうじの身みの上うへを探さぐってもらうにしくはないと考えかんがられましたから、お

伴ともひとの人をその国くににやられました。

「よく、おまえはあちらにいつて、人々ひとびとのうわさや、また、どんなごようすの方かただか見てきておくれ。」といわれました。

そのものは、さつそく皇子おうじの国くにへ出でかけていきました。すると、隣となりの国くにから、人ひとが今度こんどのご縁えん談だんについて探さがりにきたといううわさが、すぐすぐにその国くにの人々ひとびとの口くちに上のぼりましたから、さつそく御ご殿てんにも聞きこえました。

「どうしても、あの、美うつくしい姫ひめを、自分じぶんの嫁よめにもらわなければならぬ。」と、皇子おうじは望のぞんでいられるやさきでありますから、ようすを探さがりにきたものを十分ぶんにもてなして帰かえされました。

やがて、そのものは、立たち帰かえりました。お待まちになつていたお

姫さまは、どんなようすであつたかと、すぐにおたずねになりました。

「それは、りこうな、りつぱな皇子であらせられます。御殿は金銀で飾られていますし、都は広く、にぎやかで、きれいでございます。」と、家来は答えました。

お姫さまは、うれしく思われました。しかし、なかなか注意深いお方でありましたから、ただ一人の家来のいったことだけでは、安心をいたされませんでした。ほかに、もう一人、家来をやつて、よくようすを探らせようとお考えになつたのです。

「こんどは、ひとつ姿をかえてやろう。それでないと、ほんとのことはわからないかもしれぬ。」と思われまして、お姫さま

まは、家来を乞食に仕立てて、おつかわしになりました。

いろいろの乞食が、東西、南北、その国の都をいつも往來してきますので、その国の人も、これには気づきませんでした。

乞食に姿をかえたお姫さまの使いのものは、いろいろなうわさを聞くことを得ました。そして、そのものは、急いで帰りました。お姫さまは、待つておられたので、そのものが帰るとすぐに自分の前にお召しなされて、聞いたことや見たことを、すっかり話すようにといわれました。

「私は、つい皇子を目のあたりに見られませんでした。しかし、たしかに聞いてまいりました。皇子は御殿から外に出られますと

きは、いつも黒い馬車に乗っていられます。そして、いつも皇子は、黒のシルクハットをかぶり、燕尾服を着ておいでになります。そして片目なので、黒の眼鏡をかけておいでになるといふことです。」と申しあげました。

お姫さまは、これを聞くと、前の家来の申したこととたいそう違つていますので、びっくりなさいました。すぐに縁談を断つてしまおうかとも思われましたが、もし、そうしたら、きつと皇子が復讐をしに攻めてくるだろうというような気がして、すぐには決しかねたのであります。

やさしい心のお姫さまは、片目であるという皇子の身の上をかわいそうにも思われました。そして、お嫁にいつて、なぐさめて

あげようかとも思おもわれました。毎まい日にちのように、赤あかい姫ひめ君ぎみは、
ぼんやりと遠とくおの空そらをながめて、物もの思おもいに沈しずんでいられました。
すると、高たかい黒くろのシルクハットをかぶつて、黒くろの燕尾服えんびふくを着きて、
黒塗くろぬりの馬車ばしやに乗のつた皇子おうじの幻まぼろしが浮うかんで、あちらの地ち平へい線せんを
横切よこぎるのが、ありありと見みえるのでありました。

雨あめの降ふる日ひも、この黒塗くろぬりの馬車ばしやは駆かけていききました。風かぜの吹ふ
く日ひも、黒くろのシルクハットをかぶつて燕尾服えんびふくを着きた皇子おうじを乗のせ
た、この馬車ばしやの幻まぼろしは走はしつていきました。

お姫ひめさまは、もう、どうしたら、いちばんいいであろうかと迷まよ
つていられました。

「ああ、こうして、幻まぼろしにうなされるといふのも、わたしの運命うんめい

であろう。」と、あるときは、思われましました。

「わたしさえ、我慢をすれば、それでいいのだ。」と、あるときは考えられました。そのうちに、皇子のほうからは、たびたび催促があつて、そのうえに、たくさんの金銀・宝石の類を車に積んで、お姫さまに贈られました。また、お姫さまは、二ひきの黒い、みごとな黒馬を皇子に貢ぎ物とせられたのです。

いよいよ、赤い姫君と黒い皇子とがご結婚をなされるといいうわさがたちました。そのとき、一人のおばあさんの予言者が、姫君の前に現れて申しあげたのであります。このおばあさんは、これまでいろいろなことについて予言をしました。そして、みんなそれが当たったというので、この国の人々からおそれら

れ、よく知られていました。

「このご結婚は、赤と黒との結婚です。赤が、黒に見込まれている。お姫さま、あなたは、皇子に生き血を吸われることとなります。この結婚は不吉でございませす。もし、ご結婚をなされば、この国に疫病が流行します。」と、おばあさんの予言者はいいました。

お姫さまは、これを聞いて、心配なされました。どうしたらいいだろうか、それからというもの、毎日、赤い、長いそでを顔にあてては、泣いて悲しまれたのであります。

皇子とお姫さまの、約束の結婚の日が、いよいよ近づいてまいりました。お姫さまは、どうしたらいいだろうか、お供の

ひとびと
人々におたずねになりました。

このとき、黒いシルクハットをかぶつて、燕尾服を着た皇子
を乗せた、黒い馬車の幻が、ありありとお姫さまに見えたのであ
ります。お姫さまはぞつとなされました。

「なんでも執念深い皇子だといえますから、お姫さまは、早
くこの町から立ち去つて、あちらの遠い島へお逃げになつたほう
が、よろしゅうございましょう。あちらの島は、気候もよく、い
つでも美しい、薫りの高い花が咲いているということでもあります
。」と、お供のものは申しました。

お姫さまは、だれも気のつかないうちに、あちらの島へ身を隠
すことになさいました。ある日のこと三人の侍女とともに、た

くさんの金銀きんぎんを船ふねに積つまれました。そして、赤あかい着物きものをきたお姫ひめさまは、その船ふねにおすわりになりました。

青あおい海うみを、静しずかに、船ふねは港みなとから離はなれて、沖おきの方ほうへとこぎ出でたのです。空そらは澄すんでいました。そして、遠とおく、かなたには、島しまの影かげがほんのりと浮うかんでいたのであります。

船ふねには、たくさんの金銀きんぎんが積つみ込こんでありましたから、その重おもみでか、船ふねは沖おきへ出でてしまつて、もう、陸りくの方ほうがかすんで見みれなくなつた時じ分ぶんから、だんだんと沈しずみかけたのでした。どんなに、三人にんの侍女こしもととお姫ひめさまは驚おどろかれたであります。

「やはり、皇子おうじが、わたしをやらないように引ひつ張ばつているので
す。」

と、お姫さまは歎かれました。

「いいえ、お姫さま。これは、あまり金や銀をたくさん船に積み込んであるからであります。金や銀の重みを去れば、船は、軽くなつて浮き上がるでありますよ。」と、侍女らはいいました。「そんなら、みんな金や、銀を海の中に投げ込んでおしまいなさい。」

と、お姫さまは、侍女たちに命ぜられました。

侍女たちは、金や、銀を手にとつて、一つずつ海の中に投げ込みました。陸の方では、これを知っているわずかの人が、お姫さまの船を見送つていたので、このとき、海の上が光つて、水の中に沈んでいくまばゆい光を、その人々はながめまし

た。そして、お姫さまの赤あかい着物きものに、日ひが映うつつて、海うみの上うえを染そめるよう見みえたのです。

しかし、不思議ふしぎなことには、船ふねはだんだんと水みずの中なかに深ふかく沈しずんでいきました。侍女こしもとたちが手てに手てを取とつて投なげる金銀きんぎんの輝かがやきと、お姫さまの赤あかい着物きものとが、さながら雲くもの舞まうような、夕日ゆうひに映うつる光景こうけいは、やはり陸りくの人々ひとびとの目めに見みられたのです。

「お姫さまひめの船ふねが、海うみの中なかに沈しずんでしまつたのだらうか。」と、陸りくでは、みんなが騒さわぎはじめました。

赤あかい姫ひめ君きみと黒くろい皇子おうじの結婚けっこんの日ひのことでありませう。皇子おうじは、待まてども待まてども、姫ひめ君きみが見みえないので、腹はらをたてて、ひとつには心配しんぱいをして、幾いく人にんかの勇士ゆうしを従したがえて、自みずからシルクハット

をかぶり、燕尾服えんびふくを着て、黒塗りの馬車くろぬまに乗り、姫ひめから贈られ
た黒馬くろうまにそれを引かせて、お姫さまの御殿ごてんのある城下じょうかを指し
て駆けてきたのです。

城下じょうかの人々は、今度こんどのことから、なにか起こらなければい
いがと心配しんぱいしていました。ちようどそのとき、皇子おうじがやってこ
られるというわさを聞きましたので、みんなは家の中いえなかに入って、
かかり合いあひにならぬように、戸とを堅く閉めてしまいました。

はたして夜よるになると、家の前いえまえをカツポ、カツポと鳴らして通る
ひづめの音をみんなは聞きました。その後あとからつづいて、幾つか
の乱れたひづめの音が、入り混じって聞こえてきました。みんな
は、息を潜めて黙って、その音に耳を傾けたのです。すると、ひ

づめの音は、だんだんあちらに遠ざかっていきました。

しばらくすると、こんどは、あちらから、こちらへ、カツポ、カツポと鳴り近づくひづめの音が聞こえました。つづいて入り乱れた幾つもの音を聞いたのでありました。あちらにお姫さまがないので、彼らはこちらにきて探すもののように思われました。「お姫さまは、昨夜、海の中に沈んでしまわれたのだもの。いくら探したって見つかるはずがない。」と、人々は思っていました。

また、ひづめの音が聞こえました。こんどは、またこちらから、あちらへもどっていくのです。

「姫は、どこへいったのじゃ。」と、叫ぶ声が、闇の中でした。

た。

やがて、そのひづめの音が、聞こえなくなると、後には、夜風よかぜの空そらを渡る音おとがかすかにしました。しかしこうして、ひづめの音おとは、夜中よなか、家々いえいえの前まえをいくたびも往來おうらいしたのであります。そして、夜明けよあけごろに、この一隊たいは、海うみの方ほうを指さして、走はしっていきましました。人々ひとびとは、その夜よは眠ねむらずに、耳みみを澄すまして、このひづめの音おとを聞きいていました。

夜よが明あけたときには、もうこの一隊たいは、この城下じょうかには、どこにも見みえませんでした。前夜ぜんやのうち、皇子おうじの馬車ばしゃも、それにっついてきた騎馬きばの勇士ゆうしらも、波なみの上うえへ、とつとと駆かけ込んで、海うみの中なかへ入はいってしまったものと思おもわれたのであります。

夕ゆうや焼けのした晩ばん方に、海うみの上うえを、電でん光こうがし、ゴロゴロかみなりと雷らいが鳴なって、ちようど馬車ばしやの駆かけるように、黒くろ雲くもがいくのが見みられます。それを見みると、この町まちの人々ひとびとは、
 「赤あかい姫ひめ君ぎみを慕したって、黒くろい皇子おうじが追おつていかれる。」と、いま
 でも、いつているのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷発行

1981（昭和56）年1月6日第7刷発行

初出：「童話」

1922（大正11）年9月

※表題は底本では、「赤《あか》い姫《ひめ》と黒《くろ》い皇子《おうじ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い姫と黒い皇子

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>